

相手意識や目的意識をもちながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子ども

— 小学5年「いいが～松江って！こんな時間割いかが？」 —

1 単元のねらい

何年か後に行く中学校の時間割や、世界の時間割を知ること、多様な暮らしや文化があることに気付く。また、自分の考えた時間割を作成する際、総合的な学習の時間に行っている松江旅行の時間割を入れることで、積極的に伝え合おうとする態度を身に付ける。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえ

以下に示すふりかえりは、5年生1学期末の外国の方との交流の後に振り返ったものである。

わたしは初めて外国の方と会いました。わたしが一番心に思ったことは、言葉は通じなくても、表現や気持ちで伝えるということです。外国の方は、日本語は通じないので、伝えるのは難しかったと思いますが、ジェスチャーを取り入れながらしてくださったのでとてもわかりやすかったです。わたしは、言葉だけでは通じなくても、ジェスチャーや気持ちで伝えられることがわかったので、よい授業になりました。(児童A)

外国の方との交流を通して、子どもたちは、伝えようとするためには言葉や表情、ジェスチャーなど様々な方法を駆使することの大切さや、世界のたくさんの人と英語という言葉を使って伝える楽しさを体感している。そして片言の英語しか伝えられないもどかしさや、もっと英語を使って伝えたいという願いをもっている。このように、子どもが主体的に英語を学ぼうとするためには、願いや疑問を抱くことができるような課題や題材との出会いが必要である。

本学級の子どもたちは、3年生の時より年間17時間の外国語活動を行っている。1単元3時間から4時間の単元を組み、慣れ親しんだ英語の語彙を使って単元の終末にはコミュニケーション活動を行うタスク活動を設定してきた。5年生になり、外国語活動で使用する“Hi, friends! 1”のテキストを行うまでに身近な色や形、食べ物を題材にして無理なく英語を使えるように語彙を意識しながら活動を設定した。また単元の目標に応じて、外国の方や、下学年との交流の相手意識をもつための場面設定してきた。その結果、相手が誰であっても自信をもって英語を発話したり、英語を使って相手に伝えようとする姿が見られる。これは、3、4年生から外国語活動を行ってきた成果でもあるといえる。今回は伝える相手を初めて中学生に設定して行う。「中学生に伝えたい。」と思えるような1時間目の導入を行いたい。

(2) 本単元(題材)において求めたい姿とそのための手立て

本単元は“Hi, friends! 1”のテキスト“Lesson 8 I study Japanese.”～夢の時間割～をアレンジしたものである。“Hi, friends! 1”のテキスト“Lesson 8 I study Japanese.”では、教科を自由に入れ替えて夢の時間割を作成し、友だちに紹介するという活動であるが、子どもが主体的に英語を学ぶためには、願いや疑問を抱くことができるような課題や教材の出会いを大切にしたいと考えている。そこで本単元の1時間目と5時間目は中学校教員と行う。特に導入時は中学校の教員が中学生のビデオレターをもって来るという設定を行い。中学校教員の英語と、3月末に卒業した先輩中学生の英語のクイズに答えながら、教科の英語での言い方を知っていく活動を行う。この活動を通して、小学校の子どもが「自分も中学生みたいに英語を話してみたい」という願いを抱くことや、「中学校で本格的に英語を学習して、言いたいことを言えるようになろう」と、より主

体的に学習する気持ちを引き出していききたい。また、やがて行くであろう中学校の教員と一緒に授業をすることで、学習する意欲が高まるであろう。さらに、課題意識をもたせる工夫として、中学生のビデオメッセージの中で「松江旅行」について教えてほしいというメッセージを入れる。自分たちは中学校の学校生活を紹介するかわりに、自由に計画し行っている「松江旅行」をどのように組み立てたのか教えてほしいという設定を行い、課題意識をもたせる。この単元では、曜日と教科の語彙を使って“I study ~on monday.”と紹介する。そのため3日間のうち1日を「松江旅行」の時間割にし、他の2日間は自由に教科で作成する。総合的な学習の時間に行っている「松江旅行」はグループでテーマを決めてまる1日自由にプランを立て、子どもたちの力で松江の見どころを見学してまわるという活動である。お昼ご飯も移動手段も自由に計画する。教科も自由にして、1日は自由に松江を旅行するというまさしく「夢の時間割」である。このように他教科等で学習した事と関連させながら行うことで、言ってみたい、伝えたいという思いを膨らませていきたい。

このように課題意識と相手意識を明確にした単元の導入を行うことで、中学校の生徒に伝えるという相手意識と、オリジナルな時間割を紹介するという課題意識をもちながら単元を通して主体的に追求していく姿が現れるようにしたい。また、中学校生徒は伝える相手が小学校児童ということで、伝える方法や英語の精選等「相手意識」をもち、あと1年後の中学校の生活について知らせる「課題意識」をもたせ、小学校児童に伝えるためにどうしたらよいのか主体的に追求する姿を求めたい。

小学校外国語活動と中学校英語科の連携には三つの要素が必要であると言われている。「目標の一貫性」「カリキュラムの系統性」「指導法の連続性」である。本単元で言うと「主体的に学ぶ」ことが目標の一貫性である。そしてカリキュラムの系統性においては、今回の「時間割」の単元を同時に行う事が挙げられる。この「時間割」の単元は小学校でも、中学校でも行う単元である。同じ時期に設定し互いに学習していることがわかるような展開にすることで、お互いが学びあえる。しかし、その系統性については、小学校と中学校ではどのような違いがあるか指導者が明確にしておくことが大切である。指導法の連続性についてはビデオを使って小学校児童があこがれるような設定や、中学校へ行ったらあのような姿になるのだという見通しをもたせること、などが挙げられる。中学校教員と小学校教員と一緒に授業を行うことにより、小学校外国語活動が中学校英語へどのようにつながっていくのか、教師自身が指導方法を工夫しながら取り組んでいくことが、円滑な外国語活動から教科へ繋がる第一歩と考える。今回の単元の構想は、小中連携を視野に入れながら取り組む活動を考えてみた。

3 展開計画（全5時間）

	主な学習と具体的な学習内容	追求する子どもの姿
1	<p>○中学校の教科と小学校の教科の違いや、教科や松江の場所を表す英語での言い方を知ろうとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・曜日の歌を歌いながら曜日の英語での言い方を思い出す。 ・中学校のビデオレターを視聴する。 ・カードキーワードゲームを行う。 ・マッチングゲームを行う 	<p>◇中学生の英語を聞き、何を言っているのか聞き取る。</p> <p>◇課題を知り単元の見通しをもつ。</p> <p>◇紹介の仕方の見通しをもつ。</p> <p>◇単元の最後で紹介するための語彙を知ろうとする。</p>

2	<p>○曜日や教科，松江の場所を表す英語での言い方に慣れ親しむとともに，外国の小学校と自分たちの学校生活の共通点や相違点を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT教材から外国の時間割について知る。 ・曜日の歌を歌う。 ・“What do you study?” ラッキーカードゲームをする。 ・記憶力ゲームを行う。 	<p>◇様々な国の時間割について知り，文化の違いについて知る。</p> <p>◇紹介するために必要な教科や松江の様々な場所の言い方に慣れ親しむ。</p>
3	<p>○時間割について積極的に尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・曜日の歌や，教科のチャンツを行う。 ・友だちと英語のやりとりをしながら時間割を作成する。 	<p>◇紹介するために必要な時間割を作成するために教材や松江の様々な場所の言い方に慣れ親しむ。</p>
4	<p>○積極的に時間割を伝え合おうとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生と作成した時間割を伝え合う。 	<p>◇自分が紹介したい時間割を積極的に伝えようとし，中学生の時間割を聞こうとする。</p>

4 授業の実際

(1) 相手意識と課題意識を明確にもつことにより，追求する姿を持続させる

子どもが主体的に英語を学ぶためには，相手意識や課題意識を明確にすることが大切である。「知りたい」「伝えたい」という気持ちが高めるためには子どもが願いや疑問を抱くことのできるような単元目標の設定と単元構想は欠かせない。本単元では，単元の終末を中学校との交流授業として設定した（図1）。単元のゴールは総合的な学習で行った松江旅行を時間割の中で紹介する。松江旅行の事や，好きな教科を自由に組み合わせた時間割表を中学生に紹介するという活動を設定したことで，より主体的に学習する気持ちになり，単元の終末まで主体的に学ぶ事ができたと考えられる。小学校外国語活動においては他教科と関連させることにより多様な活動を仕組むことができる。ただ単に夢の時間割を紹介するのではなく，自分たちの行った活動を時間割の中に組み込むことにより，多様な言語材料や多様なコミュニケーション活動の場の設定にもつながったと考える。



図1：中学校教員と小学校教員による授業

課題意識がもてるようにするために本単元の導入で，中学生のビデオを視聴した。その中で「私たちの中学校生活を紹介するから，今やっている小学校のイベントを教えてください」と語りかける設定を仕組むことで，自然な形で「伝えたい」という必然性をもたせた。その具体的な内容については後で説明する。以下にある振り返りは，本単元の導入時に相手意識や課題意識を明確にもたせるための活動を行ったときのものである。

今日は外国語活動で中学校の先生も一緒に授業をしました。ちょっと緊張しました。中学校生のみんが、松江のことや授業のことなど、どんなことをしているのか教えてほしいと言っていました。今から中学生の人たちに良い紹介ができるように計画したいです。中学生の人たちも紹介してくれるので楽しみです。(児童A)

これから学習していく内容を計画し、より良いものにしていきたい願いがあらわれたものである。また以下の振り返りからは中学生へのあこがれが読み取れる。

中学生のビデオレターを見て、まず初めに思ったことは久しぶりに見る顔があって「なつかしいなあ〜。」と思いました。次に「すごいなあ〜。」と思いました。なぜなら「文」になっているからです。そしてすらすらと書いていたからです。わたしもあんなふうになりたいと思いました。(児童B)

(2) 小中連携させた授業の設定

本単元では最終ゴールを小中連携授業を設定した。小学校外国語活動と中学校英語科の連携には三つの要素が必要であると言われている。

① 目標の一貫性

本校校園の外国語活動・英語科における目標は「主体的に英語を学び続ける子どもの育成」である。教科構想においてこの目標を実現させるための手だてを明確にし共通理解のもと授業を行っている。小学校も中学校も育てたい子どもの姿が明確にしておくことは言うまでもない。教科部会において共通理解のもとおこなっている。交流授業であってもそれぞれの授業であっても、目標の一貫性があることで同じ方向で授業を構築することができた。

② カリキュラムの系統性

小学校においては本校の年間計画を作成するときに、小学校のカリキュラムが中学校のどこにつながっているのか明確に記して作成した。単元の語彙やフレーズが中学校に何年生のどの時期につながっているのかを明確にしておくことは、今回行う交流授業を行う上で重要な資料となる。今回行った小学校の「時間割」の単元は中学校1年生の同じ時期に学習している。系統性のある授業を行うことで子どもたちが学習の見通しをもてるようになる。小学校では紹介し合うところまでであるが、中学校になると文字に表す。伝え合う内容が同じであっても、中学では文構造が目に見えてくるようになる。そして、小学校で学習する内容に広がりが出てくる。今回の授業では、伝え合う内容が同じになる。中学生は「学校生活」について紹介し、小学生は「時間割」について紹介を行った。中学生の説明内容が小学生にも理解でき、中学生にも関連のある内容となってくる。こうしたカリキュラムの系統性を知っておくことは小中交流授業を行う上で、双方向なやりとりに深まりが出た。

今日は中学生さんが学校生活のことを英語で教えてくれました。わたしたちは書くことはしないけれど、英語で書いて、さらにわたしたちにわかるように絵もつけてくれていました。たくさん英語をしゃべっていたのでびっくりしました。わたしたちは夢の時間割を紹介しました。「I study 〜。」でしか紹介できなかったけど、聞いている人にわかるように紹介しました。中学生さんの話す英語は習っていたのでよくわかりました。(児童C)

③ 指導法の連続性・中学校教員と一緒に授業を行う

中学校では、小学校で経験した外国語活動を十分に生かして、教科としての英語の学習に結び付ける必要がある。「楽しく活動できた小学校外国語活動が、中学校では楽しく学習に取り組めない」ということがないようにするためには指導法の工夫が必要である。今回はビデオを使用して中学生の英語を聞いたり、交流授業を通して「学びと育ちの連続性」を意識させることができた。連続性

をもたせた学習指導を行いことで、基礎・基本を定着させることができると考える。中学生の姿を見たり、一緒に活動することで中学校での学習の見通しをもち、中学校へのあこがれを抱くと共に、「今は言いたいことが十分には言えないけれど、中学校で本格的に英語を学習して、言いたいことが言えるようになろう」とより主体的に学習する気持ちが生まれたり、中学校での学習に不安をもっている子どもたちへ安心感を与え、中1ギャップ解消の一方策になると考えられる。今回の単元では単元のはじめと終わり2回にわたり、中学校教員と授業を行った。T1は小学校教員であるが、中学校教員と一緒に授業を行うことにより、さらに興味関心を抱き、中学校の学習への見通しが少しでももてたのではないだろうか。

今日は中学生と学校生活や、時間割について伝える授業がありました。中学生の人はわたしたちにわかるように、写真やジェスチャーを使ってわかりやすく伝えてくれました。中学校では新しい教科や授業時間が随分違ったりする、説明の中ですべて楽しいと話してくれたので早く中学校に行きたいと思いました。英語が上手でいつかあんなふうになれるのかなあと思いました。
(児童D)

(3) 追求する姿を育成するための具体的な活動について

① 中学校のビデオレター

中学校のビデオレターについては中学校教員で作成した(図2)。中学校生徒が伝えたい内容や出したいクイズについて思いを出し合い、小学生にもわかるようにするために言葉の精選や話す速度等は考えながらビデオレターを作成した。内容については小学校教員も一緒に考えた。ビデオレターに出てくる生徒は小学校の時に執行部として児童会活動を中心に行ってきたメンバーであり、誰もが知っている生徒とした。ビデオの内容は以下のようにした。

(1) Hello, quiz No.1.

Microscope. Skeleton. Beaker. What's this? It's science. This is a skeleton. This is a microscope. This is a beaker.(An) Experiment is very interesting.

(2) Hi, how are you? Quiz No.2 History. Map. Globe. What's this? It's social studies. We use two textbooks. History and geography.

(3) Hello, everyone. Quiz No.3. Sewing machine. Frying pan. Wool yarn. What's this? It's home economics. This is a sewing machine. This is a frying pan. I like cooking.

(4) Hello, quiz No.4. Twenty-six. Dictionary. World. What's this? It's English. English is very interesting. We study English very hard. This is my dictionary.

(5) Hi, how are you? Quiz No.5. Wood. Computer. Hammer. What's this? It's industrial arts. We make chairs. It's very difficult.

(6) I like music. I like English. What subject do you like?

Do you know about the school life at the Fuzoku Junior High School? What do we study? What do we do after school? What school events do we have?

Let's talk about our favorite subjects. Let's talk about our school life.

We will come to your school. See you then. Good-bye!

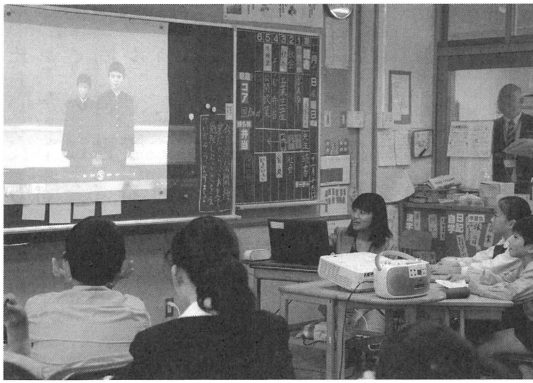


図2：中学生からのビデオレター

のカードをばらばらに裏返して貼っておき、子どもは2枚選ぶ。“Monday first” and “Monday second”めくると教科の絵カードが出てくる。そしてマッチングしていたらポイントがもらえる。アクティビティーをしながら同時に最後の時間にどのような表を作成し、説明したらよいのか見通しがもてた（図3）。

小学校児童が聞いていて難しすぎず、習得したであろう語句やフレーズを用いて、誰もが知っている先輩が話すことは効果がある活動となった。

② 単元の終末を明確にした活動例

この単元の終末で自分の作成した時間割を説明する。その時のフレーズとして“I study science on monday”というフレーズを言う。単元の初めのところでマッチングゲームを行いながら単元の終末を意識できるように、黒板に2枚ずつ教科



図3：マッチングゲーム

5 おわりに

今回の授業を通して子どもたちが相手意識、目的意識をもち続けながら単元の見通し、1時間の見通し、さらに外国語活動にある先のものを見通すことは、主体的な活動を行うためにはなくてはならないことが改めて確認できた。もちろん教師の見通しはさらにもっと幅広く、他教科との関連、行事との関連、年間計画の見通し、中学校とのカリキュラムの関連、教材教具の見通し、活動を通して子どもたちの様子を見通すことは必然である。

小学校外国語活動は英語という言語の習得の入り口にあたる。小学校教員が中学校の内容を知り、中学校教員と共に授業を構成していくことが子どもにとって、知的好奇心をくすぐられ、「伝えたい」「聞いてみたい」という活動へつなげることができるのであると実感した。小学校外国語活動は中学校英語へとつながる大切な時期であるからこそ、「言葉と言葉で人と関わるのが楽しい」と感じる活動をたくさん組んでいきたいと考える。今回の単元では導入と交流の2時間を中学校教員と行うことで、小



図4：小中交流授業

小学校外国語活動が中学校英語へどのようにつながっていくのか、教師自身が指導方法を工夫して行う取組となり、小学校の子どもたちには先の見通しや憧れ、中学校の生徒には自己有用感の生まれる授業となった。このような活動を行うためには年度末に年間カリキュラムの見直しや、次年度に向けて計画を入念に行っていく必要がある。よりよいコミュニケーションの見本を行うのは前に立つ教師である。中学校教員とよりよいT・Tをおこなうために、今回は小中連携の指導案を作成した。もっと明確な指導を行うために今後はT・Tの在り方を検討し、指導案の書き方にも反映していきたい。今回言葉で人と人がつながる楽しさを経験した子どもたちが中学校でどのように変容していくかが楽しみである。

(文責 加藤 君江)